

星閣とか、十王殿・冥府殿・山神閣など、道教の一廓が設けられ……」と述べられるが、筆者にとつては再考を要する問題と考える。例えば、七星閣の場合、それは確かに現今一般的に通用する説である。しかしながらそれは、本稿註⑩の熾盛光如来に関する資料（『高麗史』世家卷第一。他に金寛毅撰『編年通録』逸文にもあらわれる）の欠落等から生じたもので、正しい観点とは思えない。

② 後来、朝鮮後期僧華潭敬華（一七八六—一八四八）撰『天地八陽神呪經註解』等で見るとな仏教思潮の問題があるが、時代的流れを考慮して理解すべく、なお高麗朝においては詳考を要するところである。

中論の研究

— anirodhādy-aśtaviśeṣaṇa niṣṭha —

前川 重 綱

不滅・不生、不斷・不常、不一・不異、不來・不去にして、戲論が寂滅し、吉祥なる縁起を説きたまえる正覚者を、もろもろの説法者の中の最も勝れた人として稽首礼する。

（帰敬偈）

anirodham anupādam anucchadam aśāśvaram. anekārtham anānārtham anāgamam anirgamam. yaḥ pratyā-samupādaṁ prapañca upaśamati śivam. deśyāmāsa sambuddhas taṁ vande vadatāṁ varam.

『中論』において、縁起とか無自性とか空、さらに八不などは、いずれも重要な哲學的概念であるが、今回は、中論の開巻劈頭を飾る不滅・不生等の八不について考察を試みたい。

周知のとおり、中論の中心課題は縁起である。龍樹が縁起を正法として捉え、それを空仮中と展開したのが中論である。「八不」もまた、中論における主要なテーマであることは、言をまたない。従って、八不はサンスクリットでは、anirōdhādy-aśtaviśeṣaṇa もしくは aśtaviśeṣaṇa praiścedha などとして、pratyā-samupāda や śūnyatā のように、もつと頻出してよはずである。しかし、かの月称造ブラサンパダーの三ページ十二行目に、ただ一度、anirōdhādy-aśtaviśeṣaṇa（不滅等の八つの特徴）として登場するにすぎない。あたかも、「中道」という、これまた中觀思想に欠かせぬことが、中論第廿四章觀四諦品第十八偈において、madhyamā

pratipad^①として、文字どおり、ただの一回のみしか登場しないように。

さて、八不とは、不滅・不生、不斷・不常、不一・不異、不來・不去という八つの否定命題のことであるが、八不は戲論寂滅の涅槃の境地を表現する一方、アビダルマ仏教や外教の固執する有自性論に対する破邪即顯正の論破の形式、つまり論破の方法論でもある。もとより、この方法論は、嘉祥大師吉蔵が三論玄義において、

破邪即下拯沈淪^② 顯正則上弘大法^③

と述べているように、「上求菩提 下化衆生」をモットーとする大乘仏教の第一義に端を発するものであることは言うまでもない。

しかし、不滅等の八つの特徴をもつてあらわされた縁起、すなわち「八不の縁起」は必ずしも龍樹の独創とは言いがたい。その思想は、初転法輪に対する第二転法輪を意味する般若経に存在し、龍樹はこれを継承した、あるいは思想的影響を受けたと考えてよいだろう。例えば、大小幾つかの般若経群のうち、最古のテキストである「八千頌般若経」をひもどく時、そこには、中論において明晰な論理をもつて体系化された空とか無自性とか縁起、あるいは八不の原形である一切の概念否定などという諸概念が至るところに説かれている。いまは、縁起、無自性、空などについての論証は省略するが、「八不」の原形となる經文の一節だけは、ここに掲げよう。

すべてのものは言語表現を離れ、ことばを離れ、表現されず、言説されないということから般若波羅蜜に近づくべきである。^④

とにかく、般若経の譬喩と直観に論理を与えたのが龍樹であり、かれ独自の天才的論理によって、般若経の超論理が論理の世界に投影され、それが縁起即空という中觀哲學の根本的立場を基礎づけたのが龍樹である。それでは、般若経の論理を体系化するために、いかなる方法論が展開されるのか。まず、「八不の縁起」の八不について考察をしよう。

八不とは、なにか。八不とは、前述のように、不滅・不生をはじめとする四種相対概念の否定にはかならない。それは、ただ単に、八不のみにとどまるものではなく、一切の言辭立語を否定するものである。言いかえれば、あらゆる戲論 prapañca と分別 vikalpa を否定するものである。この八不を Candrakīrti は「縁起には無辺の規定がありうるのであるが、それらの八つのみを採用するのは、これらが主として論議の諸点を構成するものとなるからである」と釈し、青目^⑤は、

問曰。諸法無量。何故但以三此八事二破。答曰。法雖無量。略說三事二則為總破一切法。^⑥

と論じている。いずれも、無常なる存在の背後に、実は存在もしない自性 svabhāva

の實在を固執した結果、龍樹をして戲論生成の根源を追及する四不生論を説かした有自性論者の対破のために八不が説かれ、しかも、その八不の増加を述べているのである。事実、大智度論には、不増・不減、不垢・不淨が加わり、合計十二不^⑤が説かれている。

要するに、八不中道の「八不」あるいは、八不の縁起の「八不」は、あまねく概念の否定、すなわち一切のことばの絶対的否定 *prasajya pratīcedha* であり、その思想的根拠は縁起にあることは言うまでもない。

そして、不滅・不生が八不の筆頭を占める所以については、青目が次のように説いている。

生相決定不可得故不生。不滅者。若無生何得有滅。以無生無滅故。余六事亦無。^⑥

ところで、龍樹は、縁起無自性空説、すなわち相依相待の縁起説を中軸として、不滅・不生をはじめとする破邪即顯正の論理を展開するのであるが、より明確に、それらの本質的な意味を把握しておくために、かれの中觀思想の直接の源泉である「八千頌般若経」の譬喩をたずねておこう。

善男子よ、例えば、絃楽器^⑦の音は生じつつあるからと言え、音はどこから来るでもないし、消えつつあるからと言え、(その音は)どこかへ行くのでもなく、どこかへ移るわけでもなく、因や縁の和合 *samagri* に依存しているのである。……すなわち、器体を縁とし、絃を縁とし、棹を縁とし、柱を縁とし、皮を縁とし、撓を縁とし、人の加えるにふさわしい努力を縁とし、このように因に依存し、縁に依存したものとして弦楽器の音はあらわれるものである。しかし、(その音は)器体から生ずるのでもなく、皮、弦、棹、柱、撓からでもなく、人の加えるにふさわしい努力から音は発生するのでもなくて、実に、それらのすべてのものの和合 *samāyoga* によって施設される。消えつつある音も、どこかへ去るのではない。^⑧

この経文に説かれているのは、まさしく、縁起の道理にはかならない。すなわち因と縁とが熟せば、たちまちここに生じ、因と縁とが散ずれば、たちまちにして滅するという縁起の道理を説くものである。この縁起の道理によって、弦や器体や撓や演奏者の努力などを因縁とする弦楽器の音が、自体 *svānman* として、生滅、来去したものである。

この論証によって、自体もしくは自性は、幻のごとき、あるいは蜃気楼のごときものであり、このことによつて、「常一主宰」なる *svabhāva* の存在が謬見として否定されるのである。従つて、滅生、断常、一異、来去という四種相对概念を前述の「八千頌般若経」における弦楽器の音の生滅する因縁にそのまま配当すれば、自ら、縁起

なるが故に無自性、無自性なるが故に空、という中觀思想の本質的な意味を誤りなく探り当てることができる。

とにかく、八不は、一切のことば、すなわち言辭立語を否定するものであり、だからこそ、次に掲げる二頌は、中論の真髓を語る詩頌と断定しうるのである。

業と煩惱が滅尽するから解脱があり、業と煩惱とは分別 *vikalpa* から起る。また、これらの分別は戲論 *prapañca* から起る。しかし、戲論は空において滅びる。^(第五偈)

心の対境が滅するから、ことばの対象もなくなる。なんとすれば、法性は不生不滅であり、涅槃のごとくであるから。^(第七偈)

註① 吉蔵撰「三論玄義」(大正四五・一a)

② P. L. Vaidya, ed, *Aṣṭaśāstrīkā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Text No. 4, Darbhanga, 1960, p. 235

③ L. de la Vallée Poussin, ed, *Prasannapadā nāma Mūlamadhyamakavṛtti*, p. 11

④ 青目釈・鳩摩羅什訳「中論」觀因緣品第一(大正三〇・一c)

⑤ 「大智度論」卷八十九(大正二五・六八九a~b)

⑥ 青目釈「中論」觀因緣品第一(大正三〇・一c)

⑦ *Aṣṭaśāstrīkā Prajñāpāramitā*, p. 254, ll. 17~26

觀音信仰を中心とする教団群について

— その現況と特色 —

妹尾 匡海

筆者の当面の研究テーマは、現代における觀音信仰の状況についての考察というものであるが、このテーマにもとづいて、觀音信仰を中心とする教団群の現況と特色を明らかにしておきたいと思う。

日本における仏教系教団は約二百あるといわれているが、その正確な数は把握されていないのが実状である。これは宗教団体の法人届けが、文部大臣届け(文部大臣認証)のものと、各都道府県の知事届け(知事認証)のものと二種類があることに、その大きな原因があるといつてよいと思われる。すなわち、文部大臣認証の宗教法人は、文化庁の宗教統計などで詳細なデータが発表されているが、各都道府県の知事認